電話局を必死で守る

作　者　不　明

昭和２０年３月９日の夜から１０日にかけて江東方面の大空襲は私にとって終生忘れることができない。当夜の施設側（６０番）は防空宿直責任者が当たり、運用側（５００番）は小倉信次郎氏が責任者であった。私のもとには作業員が七名当夜の防空要員として勤務に従った。例によって南洋方面より敵機数目標により午後９時５０分警戒警報が発令されたが、空襲警報になる前に敵機は帝都上空に現れ爆撃が開始された。各自部所につくよう命じ、防空態勢に入った。

爆撃の音が局内に微かに響いてくる。しばらくして外界の様子はどうかと恐る恐る屋上に昇って見た。焼夷弾がさかんに投下され、隅田川に沿って南北にわたり火の手があがり、本所方面が風下のため、あたかも本所局を包囲するように火の手が迫ってくる。これは容易なことではないという予感がした。火がせまるにつれ、本所深川の町が昼間のようにくっきりと私の目に写った。そしてわずかの荷物を持った人々が右往左往して火に追いまくられているのが手に取るように見られた。そして敵機がまっ赤な空から急降下し機銃掃射をしていた。そして多くの人の頭上に繰り返し、繰り返し、いわゆるじゅうたん爆撃を行っていた。

私は恐ろしさに早々局内に逃げ込んだ。火の手が本所局に迫ってきた。私は局員をどうするかを考えた。もし外に避難すれば火の中を潜って荒川方面に行くより手はない。それは死を意味する。したがって私は全員に局内にとどまって、あくまで防火に努めるよう激励した。まず、窓ぎわにある書類そのほか燃えやすい物を中央に片づけさせ、要所要所にバケツと火たたきを置き、火の侵入にそなえた。また防火用の大水槽タンクの水を落そうと思ったので、タンク室に入った。水の落下の操作がどうであったか忘れていたが、ともかくいろいろのコックをひねってみた。すると運よくコックが開き、各窓上にある水口から轟然と水が落下した。やれ嬉しやと思ったのも束の間、ものの１５分くらいで全部落下してしまった。電源が切れてしまっているのでポンプは全然だめである。

そのうち深川方面から火に追いまくられて逃げてきた人が本所局を見つけ、避難のため入ってきだ。だんだん増えて約１５名くらいになった。少しばかりの荷物を持っていたが見ると手足や顔をやけどして火膨れとなっていていたいたしかった。皆つかれきっていたので、長椅子等にねかした。そのうち本所局は全く火に包まれてしまった。恐る恐る隣りの中和中学校側の閲の窓から外を見るとものすごい風とともに大きな火の粉が本所局の周りをごうごうと音をたてながら回っていた。そのとき、ふと窓下を見ると人がうずくまっている。「中にお入りなさい」と言って手を引っぱって

局舎の中に入れてやった。

局舎の中にはちょっとしたすき間から煙と火の粉が入ってきた。各窓の前面には暴風除けが設置されていた。それは木製の枠の中に土を入れたものであるがそれが悪く、枠が焼け始めた。窓は普通のガラス戸、網入りのガラス戸、よろい戸の三重になっている。そのうちょろい戸が真っ赤に焼けて局内に火を呼びそうなので各バケツの水を用意した。水道が止っていたが、幸い先刻落下した防火用水がどこからかもれたのが小便室の前にじゃあじゃあ流れ込み、いっぱい潜っていたのでそれを運んだ。火たたきに水をつけて熱くなった窓ガラスをこすると熱いガラスに急に水をつけたのでピーン、ピーンといって割れ出したので中止を命じた。もはやなすすべは何もない。火が局舎に入れば全員むし焼きだと何となく悲愴の感じがわいてきた。もはや運を天にまかすよりほかにない。煙の侵入はますますひどくなり、息苦しくなってきた。窒息を防ぐため水を浸した手拭を顔にあて三々五々局舎の片隅にぐったりとして固まった。

すべて停電し局舎はまっ暗となった。外線が焼けただれ、電線がみな混線してしまったので全加入者の受話器外しと同じことになり、セレクターが全部働き切りとなり、小ヒューズが全部飛び、警報ランプ及び警報ベルが鳴り、一種名状しがたい混乱状態となった。そして電池からは大電流が流れ、このままでは電池がおしゃかになると感じたので、直ちに電力室に入り放電を切るため大形ナイフスイッチのハンドルを握りぐいと引くと猛烈なスパークで何とも切れない。それでは、よしと、大形スパナを取って６００アンペア大形ヒューズを、えいとばかりにひっぱたいた。するとヒューズははるか遠方にすっ飛んで、ぴたっと電流が止まり、機械室の警報ベルがばたっとやみ、警報ランプも全部消えて、機械室は一瞬真っ暗になった。

私は本所工事局防空本部に磁石式電許で委細を報告しようとしてハンドルを過すと不思議にも本部が出てきた。相手は私の友人Ａ君であった。本部は深川局の三階にあったが、深川局も既に火に包まれ、これが最後の連絡だとお互いに悲愴な気持ちで電話を切った。

死の恐怖と呼吸困難との錯綜した境地を彷徨すること５時間、充満した煙もややうすれ外界が何となく静かになった感じで、夜も間もなく明けようとするうち、われに返って初めてああ生きのびたという喜びを感じた。

夜が明けて、外の様子を見ようと屋上にあがった。右を見ても、左を見ても一面の焼け野原で、まだ四方に余燼が燻ってている。見ると局の前に折り重なって十数人が焼け死んでいるのが見られた。間もなく東京通信局長が来局し、やはり屋上から四方を見たが、一面の焼野原に驚いた様子であった。私は急いで外に出た。焼死者は局前だけではなかった。方々の道路のあちこちに小山のようにかたまりより合っ

て死んでいた。全身真っ黒な者、半焼けで黒いところと白いところのある者、大人あり子供あり、妊娠している者ありで誠に凄惨そのものであった。

となりの中和小学校の前に出る。中和小学校では火の手が回り始めたとき、入口という入口、窓という窓は全部閉ざして中に籠城した。幸い中にいた者は助かったが、火に追いまくられ中和小学校までたどりつき、中に入れなかった者はうらむように皆焼け死んでいった。中和小学校のうしろには中和公園があり、ところどころ防空壕がほられていたが、皆なかばつぶれかかり、そこから焼死者の手や足がにょきっと出ていた。あの強い火では防空壕に逃げ込んだ者も皆焼け死んだのだ。

翌日になって B 君が家族を引きつれて本所局に避難してきた。家族の中には生まれたばかりの赤ん坊がいて、青い顔をしていまにも死にそうに見える。彼は大丈夫かしらと心配であったが、としよりはベンチに寝かした。彼は昨夜から今朝にかけて火に追いまくられ、のがれ回って、多分局は残ったであろうとたどりついてきたのだという。途中おなかがすいてへとへとになったが、ふと足下にお釜があったので蓋を開けて見るとちょうどおいしく御飯が炊けてあったのでびっくり、天の恵みと思い食べた。作り話のようなほんとうの話であった。お米をといてお釜に入れそが焼けたとき丁度お釜の米が炊きあがっていた。

東京の電話局は当時自動局と手動局が併存していたが自動局は全部コンクリート作りで防火装置が厳重であったため消失を免れたが手動局は木造のため皆焼けてしまった。中でも最も悲惨を極めたものは墨田電話局で当夜女子職員が電話交換業務に従事していたが、火の手が局舎周辺に迫ってきたのに交換業務を守るうち責任者が従業員の生命の危険を感じて退避の決意をしたときは既に遅く、一、二名の従業員が火の中を潜り抜けただけで後のものは火の中を突破することを断念し、局舎に戻り交換台や配線盤のところで折り重なって焼け死に、31 名の職員が無惨な死を遂げてしまった。

２～３日して、当夜非番で生き残っていた人が、数日前までお互いに「何番へ」と交換に従事していた同僚が変わり果てた姿となったのを悲しみ、本所局に仮の祭壇を設けた。私は自分とその他の本所職員が幸い本所局に火が入らなかったので命が助かったが、同時に本所局に避難してきた人も全員無事であったので、その天佑に感謝した。しかるにこの業火に無惨に焼け死んだ人のことを思うと全く胸がつまる思いで暗然とせざるを得なかった。

本所局の周りだけでも焼死者がどのくらいいるか、殆ど数が分からない位であった。そして何日も何日もそのまま放置されていたが、炎の中を家族ちりぢりに火に追いまくられてやっと助かった人が焼跡にもどり、うつろな目で肉親の死骸を探している姿か

いとも哀れであった。そしてやっと自分の夫、自分の妻、自分の子供を見つけ、ひざまずいておいおい泣いていた。その死骸を見ると半焼けの人もいたがまっ黒になり、だれか分からないようなものもいて、私はよくその焼死者が肉親であるかどうか分かるのかと不思議に感じた。そして夜になるとどこかに帰り、翌日も、その翌日もやってきて、死骸を前にしてただ泣くばかりであった。ある人は死骸の頭のところにお線香を立て、またある人は真新しい布団をもってきて死者をその上に載せておがんでいた。このような状態がくる日もくる日も続いて葬るすべが全くなかった。

数か月してやっとこれらの死者が葬られるようになったが、一家全滅の人や引取りのない人、又はだれかまったくわけの分からない人は、軍隊がやってきて片付け始めた。始めはトラックに丁寧に死者を運んでいたが、なかなかはかどらないのでつるはしでひっかけて材木でものせるようにして運んでいった。そして町の要所要所に大きな穴をあけ放り込み、薪と石油で火をつけ焼き始めた。それが毎日毎日続いて、夜は局の屋上から見るとあちらこちらに燃える火がちらちら見え、一面の焼野原のため毎日のように風が吹いて焼けトタンが音をたて、また人の焼けるにおいが鼻につき鬼気せまる状況を呈していた。

他の資料提供者　：
橋本代志子、小泉良一、後藤道江、
相沢春夫の各氏